

私を堕とせるのはただ一人？いや、こ

からが恋人だし！

【第10話】

みなぎし　すい

## 【人物一覧表】

柊千咲：女子高生

白石彩夏：社長令嬢

神谷里見：女子高生

杉園愛梨：モデル

飯田早苗：女優

柏木奈子：千咲の叔母

佐藤（75）：ボランティア

高橋（41）：ボランティア

鈴木（80）：ボランティア

国語教師：国語教師

女子生徒A：千咲のクラスメイト

女子生徒B：千咲のクラスメイト

スタッフ：モデル事務所のスタッフ

○女子高・3の3教室（朝）

白石彩夏、柊千咲の胸を揉んでいる。

その様子を見ている神谷里見、杉園愛

梨、飯田早苗。

千咲「んっ！ イク！」

千咲、頬を赤らめながらビクビク震える。

里見「ずるいぞ！」

里見、千咲の胸を揉む。

彩夏「言えたんだ」

里見「お、おう。負けないからな」

彩夏「でも、千咲がどっち選んでも、この5

人で友達だからね」

里見「おう、絶対だぞ」

千咲「うん。2人とも、わたしがんばって答  
え出すから。それまで待つて」

彩夏「ゆっくりでいいから、本心で答えない  
のだけは絶対やめてね。例えだれかを気遣  
うためだとしても。それは、せつかく告白  
した人の勇気と想いを踏みにじることにな

「ちやうし、悲しくなつちやうから」

彩夏、千咲をじつと見つめる。

※ ※ ※

(フラッシュ)

千咲、彩夏を平手打ちする。

※ ※ ※

千咲M「あの時、わたしは本当は彩夏が好きなのになんか怒つただけで彩夏を叩いて悲しませた。だから、もうそんな過ちは絶対しない」

千咲「そうだね」

千咲、彩夏に向かってにつこり笑う。

○ 同・周辺（朝）

T「土曜日」

千咲と愛梨、大人や老人たちと、学校周辺でゴミ拾いやはき掃除をしている。

千咲「落ち着く……」

千咲、ほわほわした表情になる。

佐藤（75）「よくがんばってるねえ」

老人の佐藤、千咲に向かってうなずく。

鈴木（80）「そうねえ」

高橋（41）「みんな汗流してるのに。そんなほわほわしてるなんてあなただけよ」

千咲「確かに変ですよね。でも、どうやら本心みたいですね」

愛梨「そういうところが、本当に優しいってことなんだね。飾らない優しさ」

千咲「あ」

里見、学校前を通りかかる。千咲、それを見る。

里見「よう」

千咲「里見ちゃん！　おはよう！」

里見「愛梨。お前、仕事とかねえのか」

愛梨「ないから、ボランティアやつてるの：」

⋮

里見「そうかよ」

愛梨「うん」

愛梨、里見から視線を逸らしてはき掃除をする。

千咲 M 「愛梨ちゃんは優しいし頑張ってるなら、それが伝わって里見ちゃんもだいぶ愛梨ちゃんに対して柔らかくなつた。けどやつぱり、そう簡単に許すなんてできないよね」

千咲、悲しそうな表情をする。

#### ○カフェ・内装

千咲と愛梨、横並びで席に座り、パンケーキやパフェなど食べてている。

千咲「たのしー！ ザ・女子会って感じ、憧れてたあ！ 昔は友達ほぼいなかつたからなあ」

千咲、にこにこしている。

千咲「愛梨ちゃんつて、好きな人のタイプとかあるの？ 金持ちとかイケメンとか、なんでもいいよ」

愛梨「え？ えっとね。なんだろ。綺麗な人がいたら好きになっちゃうかも」

千咲「やっぱそうか！」

愛梨 「でもね。ほわほわしてあつたかくなつたり、優しくにこにこしてゐる人とか、いい、かな……」

愛梨、千咲に上目遣いする。

千咲 「ぎやわいいー！ 愛梨ちゃんマジ天使ー！ 地雷コスとのギャップもマジかわい！」

「！」

愛梨、ドキッとして頬を赤らめる。

愛梨 「う、うれしいっ」

千咲 「やつぱモデルなだけあるー！」

千咲、愛梨の手を握つてぶんぶん振る。

愛梨 「わあああ！」

千咲 「あ、ごめんごめん。愛梨ちゃんがあまりにもかわいかつたから」

千咲、手を離す。

愛梨の頬がより赤くなる。

千咲 「パフェつていろいろフルーツ乗つてるけど、何が好き？」

愛梨 「い、イチゴ」

千咲 「わかるー！ それとメロン！ メロン

つておいしい！」

愛梨 「でも、野菜」

千咲 「え？ ああ、イチゴがね。まあまあ。  
細かいことはいいの！ ほら、わけてあげ  
る！」

千咲、愛梨のパフェに自分のイチゴを  
乗せる。

千咲 「わー、ちょーたのしー！ 愛梨ちゃん  
とパフェかあ⋮⋮えへへへ」

千咲、満面の笑み。

愛梨 「優しいね」

千咲 「えへへ。優しいといえばさ、愛梨ちや  
んつてアンパンマン好きって言つてたよね  
？」

千咲、愛梨を見る。

愛梨 「うんつ。優しくてかつこいいヒーロー  
だから、わたしの目標にしてるんだ。いつ  
か、いつか」

千咲 「素敵！ 優しい愛梨ちゃんらしい！」

愛梨 「いつか、里見ちゃんとも友達に戻れた

らしいなあ……

愛梨、涙を流す。

千咲 「あ、愛梨ちゃん！ 愛梨ちゃんは優しいから！ かわいいから！ だから泣かないで！」

千咲、愛梨の背中をさすり、頭をなでなでする。

愛梨、手で自分の胸にそっと触れる。

心臓の鼓動が愛梨自身に伝わる。

愛梨 M 「千咲ちゃん……」

○女子高・3の3教室（朝）

千咲、教室に入る。

千咲 「え？」

里見、彩夏の胸ぐらを掴んでいる。

里見 「てめえ！ もつかい言つてみろ！

分で言つたことも守れねえのか！」

彩夏 「ま、待つて里見ちゃん！」

早苗 「やめなさい里見！」

愛梨 「こ、怖い……」

愛梨、おびえている。

クラスメイトが里見と彩夏を見ている。

千咲 「やめて里見ちゃん！ 落ち着いて！」

里見 「これが落ち着いてられるかよ！」

里見、彩夏を離す。

千咲 「何があったの？」

里見 「ニュース見てねえのか？」

里見、スマホを見せる。

千咲「アメリカ……企業の御曹司と……けつ、

こん？ 彩夏が、成人に、なつたら」

千咲、呆然とする。

千咲「向こうは、アメリカに、居を構えて、  
いる……」

千咲、ゆっくりと彩夏を見る。

里見、静かな怒りの表情になる。

里見「てめえ言ったよな千咲に。本心じやね  
えのはやめろって、悲しくなつちやうから  
つてよ。てめえががんばつて答え出そうと  
してる千咲の気持ち踏みにじつてんじやね  
えか」

彩夏 「この事業は、これから日本のために  
も……」

里見 「人を笑わせる職業目指すんじやなかつ  
たのかよ！」

○（回想）同（朝）

いつもの5人が集まっている。

彩夏 「決めた。わたし、会社継がないわ」

他4人「えっ?」

彩夏 「けさの千咲を見て思つたんだ。もつ  
と、誰かに笑いを届けられる職業につきた  
いって。だから、お笑い芸人とかなんでも  
いいから、人を笑わせる職業につく！」

飯田早苗 「いいの？ 枝なんかのために」

（回想終わり）

○ 同（朝）

里見 「てめえはそれでいいのかよ……！」

里見、拳を握る。

彩夏 「よくないよ……でも、事業が大きすぎ

る！

彩夏、目に涙を浮かべる。

千咲「な、なんで。アメリカに……」

彩夏「ごめん、千咲」

千咲 「嫌だ」

千咲の頬を流れる涙。

千咲「嫌だああああああああああああああ！」あああああ

ああああ！」

千咲、声をあげて大泣きする。

千咲 「ああああああああああ！」

彩夏、千咲を抱き寄せる。

彩夏 「ごめんね。ごめんね……！」

好きだよ

同

授業中。

千咲、机につつぶしている。

チヤイムが鳴り、国語教師が教室を出る。生徒たち、各自昼休みへ。

里見「あれはだめだ」

里見、彩夏を見る。彩夏、里見を見てから、申し訳なさそうに視線を逸らす。

千咲「でも、仕方ないことだから」

里見「あたしがなんで怒ったのかわかんねえのか。友達を……千咲を大事に想つてるからなんだぞ」

千咲「うん、そうだね……里見ちゃんは優しいね」

里見「大丈夫かよ」

千咲「なんでだろ。なんで、うまくいかないのかなあ……」

千咲、肩を震わせていてる。

里見「お前のせいじやねえよ」

早苗「彩夏にも仕方ない事情があるとはいえ、

千咲が悲しんでいるのは見てられないわ。

千咲、大丈夫?」

千咲、突つ伏したまま首を横に振る

愛梨「(小声で) 里見ちゃん。これでも、言

つてもいいのかな……」

里見「(小声で) 決まったのか。うーん……」

いや、今はよせ。こんなんじや愛梨の告白  
イコール悲しいって結びつけちまうかもだ  
からよくねえ。それより、あたしたち3人  
で千咲のそばにいてやろう」

早苗「そうね……千咲、今日はどうする？」

千咲「帰る」

早苗「1人で？　だめよ、それならわたした

ちもついていくわ」

千咲「じゃあ寝てる」

早苗「そう。止めはしないから、ゆっくり休  
みなさい。遅れは後で教えてあげる」

千咲、うなずく。

千咲N「それから、わたしは授業中ずっと寝  
ていた。喧嘩じやないのに、彩夏にかける  
言葉が浮かばず、話せなかつた。わたしの  
心が、また崩れ去る音がした」

○柏木宅・居間（夜）

千咲、床に寝転がっている。

柏木奈子、千咲に歩み寄る。

奈子 「お風呂入る？」

千咲、無反応。

奈子 「またお友達に何かされたの？」

千咲、自分の服をぎゅっと握る。

千咲 「違うよ。ただ、彩夏がアメリカに行っちゃうだけ。結婚するから。彩夏は悪くないから怒らないで。大企業のすごい事業だから、仕方ないの」

奈子、千咲を優しくなれる。

奈子 「千咲ちゃんはそれでいいの？」

千咲 「よくない」

奈子 「彩夏ちゃんのことが大好きなんですよ？」  
言いたいこと言わなくていいの？」

千咲 「もう友達になつてるから」

奈子 「ああ、そうじやなくて。もつと特別な  
気持ちはないの？」  
つてこと」

千咲 「それは……」

千咲、寝返りをうつ。

千咲 「わかんない。彩夏のことが大好きだけ  
ど、そのなかはわかんない」

奈子「ならなおさら、彩夏ちゃんと話をしない。このまま自分の気持ちを確かめずに終わったら、一生後悔することになるよ」

奈子、依然千咲をなでている。  
千咲「わたし1人が、大規模事業を潰しちやつていいの？」

奈子「いいか悪いかじやない。そこは、ちゃんと気持ちを伝えなきや。わたしは、心のないA.Iなんかより、かわいい千咲ちゃんのほうがずっと大事なんだから。後悔だけはしないって約束して」

千咲「……」

奈子「千咲。約束できる？」

千咲「……」

奈子「相手のことをおもんばかりすることもいいことだけど。一旦、相手のことを考えないで気持ちを伝えた方がいいよ」

千咲「なんで」

奈子「その方が、素直な気持ちが伝わるから。もしもちゃんと告白するなら、絶対に素直

になつて」

千咲、目を大きく開く。

○（回想）女子高・3の3教室（朝）

彩夏「ゆっくりでいいから、本心で答えないのだけは絶対やめてね。例えだれかを気遣うためだとしても。それは、せっかく告白した人の勇気と想いを踏みにじることになつちやうし、悲しくなつちやうから」

彩夏、千咲をじつと見つめる。

（回想終わり）

○柏木宅・居間（夜）

千咲、目に涙を浮かべ、歯を食いしばり、涙を流す。

千咲「彩夏…彩夏っ！」

奈子、千咲の頭と体を優しくなでる。

奈子「よしよし。千咲、悲しいときは奈子おねえさんがいるからね」

奈子、悲しそうに笑いかける。

千咲 「あう……」

○ 同・玄関（朝）

千咲、扉を開ける。

奈子 「いってらっしゃい、無理だつたら帰つ  
てきていいからね」

千咲 「いってきます」

○ 女子高・校門（朝）

千咲、うつむきながら校門をくぐる。

○ 同・廊下（朝）

千咲、うつむきながら歩いている。

女子生徒2人、千咲のもとへ小走り。

女子生徒A 「柊さんだいじょうぶ？」

千咲 「ああ、心配しないで。だいじょうぶだ  
から」

女子生徒B 「柊さん、白石さんのこと好きな  
の？」

千咲 「えつ」

女子生徒B 「いや、いつも一緒にいるし、胸揉まれて気持ちよさそうに喘いでるから」

千咲、顔を赤くする。

千咲「え、それは…恥ずかしいからあんまり掘り下げないでえ」

女子生徒B 「ここが女子高で、あんま変に思

われてなくてよかつたね」

千咲「なんでわざわざわたしの心配を」

女子生徒A 「柊さん優しいでしょ、クラスのみんなにも。女の子助けてたのも知つてるし」

千咲「ああ、うん。普通に飛び出しちやつて」

女子生徒B 「そんなこと普通でする人いないよ。とにかく、言いたいことがあつたら白石さんに言つた方がいいんじゃない？」

### ○ 同・3の3教室（朝）

千咲、自分の席に座り、

千咲M 「言つた方がいい、か…」

彩夏をちらつと見る。彩夏、勉強して

いる。

里見と早苗と愛梨、千咲のもとへ歩み寄る。

里見「よう。どうだ、少しは落ち着いたか」  
千咲、静かにうなずく。

早苗「ジエームズ・ペリーのことを感じしているのなら、気にするべきではないわ。あたしたちにとつては、ぶつちやけ今のままでいいもの」

千咲「ジエームズ・ペリー：企業の御曹司。でも、わたし1人のせいで国益の損失だなんて嫌だ」

早苗「はあ、困ったわね。あなたの場合、それも本心っぽいもの。だから、いつときの感情などではなく本気で迷っている」

愛梨「だいじょうぶ？」

里見「おい。今すぐ千咲を助けられんのはお前しかいねえぞ」

彩夏「…」

彩夏、沈黙。

里見 「千咲を泣かしたら許さねえ。まあ、もう泣かしてるけどな」

里見、怒つて いる表情。

千咲と彩夏、少し目を合わせ、視線を逸らす。

早苗 「千咲。彩夏にも時間が必要みたいだから、あなたもリフレッシュした方がいいわ。

彩夏、聞いてる？ あなた、自分で言つた言葉なんだから、ちゃんと答え出しなさいよ」

彩夏、勉強の手を止める。

彩夏 「……うん」

彩夏、勉強の手を動かす。

#### ○ 同・下駄箱

千咲、靴を履き替えて いる。

愛梨、千咲の隣へ。

愛梨 「ねえ。こんどの休み、モデルの仕事があるんだけど。千咲ちゃんも、一緒にどうかな。千咲ちゃんの写真見せたら、すごく

いいって」

千咲「そつか、でもわたしが……」

○（回想）同・3の3教室（朝）

早苗「千咲。彩夏にも時間が必要みたいだから、あなたもリフレッシュした方がいいわ」

（回想終わり）

○同・下駄箱

千咲「行かせてもらおうかな。せっかく、大好きな友達が誘ってくれたんだし」

千咲、愛梨に笑顔を向ける。

愛梨「う、うれしい！」

愛梨、千咲の手を取る。

○モデルの事務所・楽屋

愛梨と千咲、スタッフにメイクされて  
いる。

千咲「あ、愛梨ちゃん？わたし、すつごい

エッチな恰好なんんですけど……」

千咲、肩と胸が出たハイレグの服を着て いる。

マイクが終わる。

千咲「でか！ すんなりわたしに仕事回りす ぎ！ 映画撮影の時もそうだつた！」

愛梨「だって、あのファッショントリオで見 られてたもんね。モデルや女優集まつてる 中で5位だもん」

千咲「それかー！ つていやいやそれでも突 っ込みどころあるよ」 女優の仕事はその 前だった！』

愛梨「それは、早苗ちゃんと千咲ちゃんが似 てるし、千咲ちゃんがかわいいから」

千咲、ドキッとする。

千咲「ま、まあ？ 嬉しいかな？」

千咲、顔を赤くして照れる。

スタッフ「それでは、撮影に向かいましょう」

○ モデルの事務所・撮影場所

千咲と愛梨に向かつてカメラを構え、

写真を撮つて いる カメラマンたち。

誰かの指示で撮影がストップする。

千咲と愛梨、休憩スポットへ。

千咲 「恥ずかしい！ 尻モロに見えてるでし  
よこれ！」

愛梨 「でも、すごくかわいい」

千咲 「なわけあるかーっ！」

スタッフ、千咲のもとへ歩いてくる。

スタッフ 「それでは 杉園様、柊様。ペアのグ  
ラビア撮影に向かいましょう」

千咲 「…は!?」

千咲、目を見開いて驚く。